

# お産&子育てサポート

発行・編集  
お産&子育てを支える会  
代表 齊藤 智孝  
編集者 東 直美  
TEL/FAX 090-7103-2240

## プラスチックゴミ削減意識 日本は最下位・・・

### プラゴミ廃棄 日本2位

日本が廃棄している国民1人あたりのプラスチックゴミ(以下“プラゴミ”)の量が、年間32kgで、世界ワースト2位、ちなみに1位はアメリカです。又、海洋排出プラゴミ1位は中国だそうです。

ストローを紙に、マイバッグの導入やプラゴミ分別等で、プラスチックゴミを減らす運動が展開されましたが、最近はその忘れ去られたのか、私達の周りにプラスチック製品は以前と変わらずあふれています。それだけでなく、「プラゴミ削減意識19カ国中最下位」という恥ずかしい結果が公表されました。19カ国(オーストリア、ブラジル、カナダ、中国、エジプト、ドイツ、インド、インドネシア、日本、マレーシア、メキシコ、ノルウェー、フィリピン、南アフリカ、韓国、タイ、アラブ首長国連邦、イギリス、アメリカ)に住む16歳以上の男女19,088人(各国約1,000人)を対象に2024年2月にグリーンピースが調査した結果です。

### プラゴミの影響が生態系にまで

プラスチック製品は焼却だけでなく生成にも多くのCO2を排出すると言われ、地球温暖化に悪影響を及ぼしています。また海洋ゴミの80%はプラゴミと言われており、分解されないプラゴミは紫外線や波によって劣化し砕け、最終的にはマイクロプラスチックとなり、海洋に漂ったり海底に蓄積されています。魚や貝と言った海の生物がそれを体内に取り込み、食物連鎖で最終的に人間の体内にも入り込んできているのです。また、プラスチックは化学物質を吸着しやすく、吸着した化学物質の影響も含めて生物の命に悪影響を及ぼし、生態系のバランスを崩して行っています。人間ももちろん、海外の調査ではマイクロプラスチックが人間の肺や血液から発見(オランダやイギリスの調査)され、頭痛やめまい喘息、癌等の影響を及ぼしているのではと言われかけているそうです。

### プラゴミ焼却はリサイクル?

日本はそういったプラスチック問題に対して「プラごみリサイクル率84%」と表明していますが、そのほとんどがサーマルリサイクルと呼ばれる「焼却」なのです。焼却によって有害なダイオキシンを発生したり、多量のCO2を排出する等の問題もあり、海外では焼却はリサイクルではないと否定されており、再利用か削減しかな

いそうです。日本が焼却することでプラゴミ問題は解決とあぐらを掻いている間に、海外ではプラゴミを粉砕して再度プラスチック製品をつくる研究開発が進み、技術面だけでなく費用も安価となり、生分解性(微生物による環境中での水と二酸化炭素への分解が可能)のプラスチックが作られています。スターバックスやマクドナルドは紙製ストローが、品質的にも価格的にも実用的になり、プラスチック製ストローやマドラーの廃止を発表、紙で代替することが難しいコールドドリンク用のカップについても、生分解性プラスチックに置き換えるのを検討しているそうです。ペットボトルを大量消費し、プラスチック汚染企業第1,2位のコーラやペプシも、安価なプラスチック再生技術を開発した欧米の企業とペットボトルの調達契約も締結し「再生ペットボトルを徐々に切り替えていく」と発表しています。

### プラスチック製品を自然素材の物に

EUでは2019年7月に「特定プラスチック製品の環境負荷低減に関わる指令」が発効し、使い捨てのプラスチックや発泡スチロールで作られた食器や食品容器の市場流通を禁止し始めました。(それはプラスチック製品を作る企業の責任なのです。日本は企業の責任はほぼ問われていません。)そして、昔ながらの紙やガラス、陶器、布などの自然素材の活用や、「生分解性プラスチック」などの開発も続けられており、実際のところ代替案はいくらでも豊富にあるそうです。

### 魚よりゴミの数の方が多くなる

現状のままだと海洋のプラスチックゴミは2050年には魚の数より多くなると言われていています。焼却やリサイクルよりも、プラスチック製品をいかにして削減、自然に優しい製品に変えていくかが重要ではないでしょうか? EUの関係者は「プラスチックは便利な素材であるが、環境に大きなダメージを与え、さらに観光、漁業、輸送などの経済活動にも損害を与え、また、その処理にも高額のコストがかかる」という点を指摘しています。使い捨てのプラスチック製品を使うよりも、環境にやさしい素材を使う方が、長い目で見ると効率的ではないでしょうか? 次世代の子どもや孫達にクリーンな地球を残すのも、今を生きる人間の責任だと思うのですが。





## 少子化対策になるのか？～出産費用の保険適応化？～ part2

2022年の出生数が80万人を割り、昨年、2023年はコロナの影響もあったのか、国の予想より12年も早まる速さで、75.8万人と減少し、出生率は過去最低の1.26まで低下しています。

そんな中、国は出産費用負担の軽減に出産育児一時金を50万円まで値上げを行いました。しかし、出産費と出産育児一時金の値上げの動きを見ると、完全にたちごっこの有様で、出産育児一時金の値上げが決まり施行される数ヶ月前から、出産費がそれを見込んで値上げされるのが繰り返されています。結果として経済的負担の軽減にはなっていないのです。その上、今日の物価高騰に企業も賃金を増額していますが、厳し家計の経済状況が改善するほどの賃金UPにはなっていないのが現実です。

出産費用はとてつもなく高額になっていますが・・・

出産育児一時金の増額が少子化対策になっているのか問われる中、国は2026年から出産費用の健康保険の適応化を検討しているらしいです。出産も病気の時と同じように3割負担で済むよという事らしいですが、詳細はまだ解らない状況です。



### もし、出産費用の保険適応になったら

・・・懸念されること

① 保険の点数化は医療行為によって決められています。点滴をして何点、ガーゼ交換で何点というように。その点数で金額が決まるのですが、出産の点数化が低ければ、出産数の少ない医療機関は収入が減り潰れないか？結果としてお産の集約化が進み大きな病院でしか産めなくなるのでは・・・

② 医療行為が多い方が点数が稼げ、収入が増えるとなると、自然に産めるお産でも医療の介入が増えないか？不要な会陰切開、縫合、収縮剤の投与等が行われたり、帝王切開がふえるのでは・・・

③ 数時間ぐらいのお産も、1日以上かかるお産も同じ点数なの？時間で点数がかかるようなら早めたり遅めたりと、人工的な操作が行われたりしない？

④ 医師が行う行為だけが保険点数？パパママ教室や助産師外来で話を聞いてもらったり、陣痛の時につきっきりで腰をさすってもらったり、母乳を飲ませられるようにサポートしてもらったりと助産師のとても大切なケアは保険点数化されるのか？

⑤ 病院だけでなく、助産所(院)出産や自宅出産も保険適応になるのか。もし、病院や医療機関での出産だけが保険適応となれば、以外のお産は自費で高額になるのか？と、色んな心配が出てきます。

### 自然なお産の介助技術はどうなる？

30～40年前までは逆子でも通常分娩が行われており、医師は逆子の赤ちゃんの経膈分娩を普通に行っていました。しかし、逆子イコール帝王切開となつて30年以上経過すると逆子の分娩ができる医師はほとんどいなくなってきました。技術の伝承が途絶えたのです。お産の保険化が実現し、助産所で保険が使えず自費になると、自然なお産を希望する人は益々減り、自然なお産介助技術は逆子同様、途絶えるのではと危惧します。



### 自然なお産は少子化対策になる？

奈良女子大学の松岡悦子名誉教授が2013～2022年度の助産所・自宅での出生順位を調査し、全国の出生順位と比較した結果、「ほぼどの年度においても、第2子以降は助産所が全出生より高い。」と結果を導かれています。

99%が医療機関で出産するので第1子は当然病院が高いのですが、第2子以降は助産所・自宅という助産師が寄り添い、

全出生の年次別出生順位

年	第1子	第2子	第3子	第4子	第5子以上
2013年	46.6	36.8	13	2.7	0.9
2014年	47.1	36.3	13	2.7	0.9
2015年	47.4	36.1	13	2.7	0.9
2016年	46.9	36.4	13	2.8	0.9
2017年	46.3	36.8	13.1	2.8	1
2018年	46.3	36.8	13.1	2.8	1
2019年	46.2	36.4	13.3	3	1.1
2020年	46.6	36.1	13.3	3	1.1
2021年	45.8	36.2	13.6	3.2	1.2
2022年	46	36.5	13.2	3.1	1.2

助産所・自宅出産の年次別出生順位(単位:%)

年	第1子	第2子	第3子	第4子	第5子以上
2013	25.5	41.9	25.7	5.2	1.6
2014	25.9	40.4	24.4	6.7	2.7
2015	25.7	42.4	23.1	7.1	1.7
2016	22.2	43.4	24.8	7.4	2.3
2017	23.7	39	27.1	7.7	2.5
2018	22.4	42	24.2	8.4	3
2019	20.7	40.5	26.7	7.9	4.3
2020	24.4	35.8	27.8	9.2	2.8
2021	23.1	39.7	24.8	8.5	4
2022	25.9	39	24.5	7.4	3.2
2013-2022	24	40.6	25.2	7.4	2.7

自然なお産をするところの方が有意に高い結果が出ました。

少子化対策に経済的負担を軽減させようと国はお産の保険適応をしようと考えますが、経済だけの問題

でしょうか？何故女性が産まないのか？助産所で産む女性が第2子、第3子と産む事の意義を考えてほしいと思います。

世界ではお産を無料にしている国はイギリス・フランス・ドイツをはじめたくさんあります。公的保険に入っていて、公的医療機関での出産の場合と条件付きが多いですが、先進諸国は無料が多いのです。そして、そういう国の出生率は日本より高いのです。

出産費用の保険適応がどうなるのかまだ不明ですが、女性が産みたいところで、どんなお産をしても無料になることを願います。

記事に関するご意見やご質問は右のQRコードよりお願いします。6月の予定もそちらよりご覧下さい。

